

ジョン・デューイ

『民主主義と教育』 (1916年) の
全体像

life と democracy

growth 「エンジョイ○○」

occupation オキュペーション

disposition ディスポジション

デューイ『民主主義と教育』（1916年）の全体像

あなたの教育学をつくるために。問題に向き合うとき、横にいる相談相手の一人。加藤「[教育学の全体像](#)」

英文は、DEMOCRACY AND EDUCATION by John Dewey 1916

<https://www.gutenberg.org/files/852/852-h/852-h.htm>

段落番号をつけて、ノートにまとめていく。

構造的。

life ライフの連続・累積が大きな流れ。

人類：社会の系、集団の系、個人の系 ←生物として

哲学的に論じるときには、life →experience 経験

政治の話題は『民主主義と教育』には少ない（第7章五で少し国家論あり）。デモクラシーとは狭く政治の意味でなく人類のあり方。政治論は『公衆とその諸問題 The Public and its Problems』など。

デューイがたたかったものは分断と孤立。「概念」もバラバラになっていくのをつなぎ直した。unity

流れの意味 基準とゴール

民主的基準（社会をはかる尺度）（望ましい諸特徴）：第7章④上136ページ2行目

「意識的に共有している関心が、どれほど多く、また多様であるか、そして、他の種類の集団との相互作用が、どれほど充実し、自由であるか」

↓

望まれる変化第23章⑳ 下184ページ6行目～

「望まれる変化の意味を形式的表現ではっきり示すことは難しいことではない。それは、あらゆる人が、他の人々の生活を—そう生き甲斐のあるものとするような仕事に従事（be occupied）しており、したがって、人々を結びつけて一緒にする絆が—そうはっきりと現われる—人々の間の隔ての柵をとりこわす—ような、そうい

disposition 性向、傾向 tendency intellectual and social (moral) . . .

第4章「成長としての教育」

⑤ 生命のあるところには、すでに強く激しい活動力が存在している

成長は、その活動力がなすもの

⑧可塑性 自分の性向 disposition 心的傾向を保持しながら周囲に同調する

さらに深く . . . 経験から学ぶ能力 望ましい経験を持ち越す

徳を生み出す性向は、衝動か習慣か知性か—アリストテレス『ニコマコス倫理学』は「習慣」

デューイの民主主義と教育

目次

第一章	生命に必要なものとしての教育	一一
第二章	社会の機能としての教育	二五
第三章	指導としての教育	四六
第四章	成長としての教育	七四
第五章	準備、開発、形式陶冶	九三
第六章	保守および進歩としての教育	一一六
第七章	教育に関する民主的な考え	一三三
第八章	教育の諸目的	一六二
第九章	目的としての自然的発達と社会的に有為な能力	一八〇
第一〇章	興味と訓練	二〇〇
第十一章	経験と思考	二二三
第十二章	教育における思考	二四三
第十三章	教授法の本質	二六一
第十四章	教材の本質	二八五

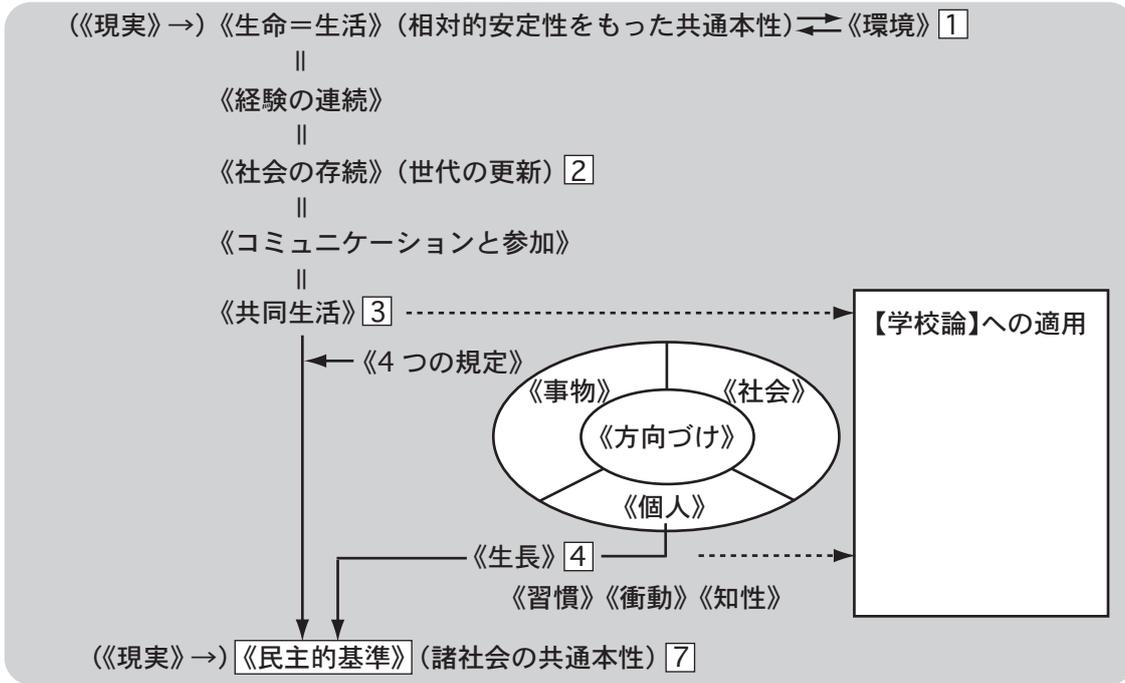
〔以下下巻〕

第一章	教育課程における遊びと仕事
第二章	地理および歴史の意義
第三章	教育課程における科学
第四章	教育的価値
第五章	労働と閑暇
第六章	知的学科と実際的学科
第七章	自然科と社会科・自然主義と人文主義
第八章	個人と世界
第九章	教育の職業的側面
第十章	教育の哲学
第十一章	認識の理論
第十二章	道徳の理論

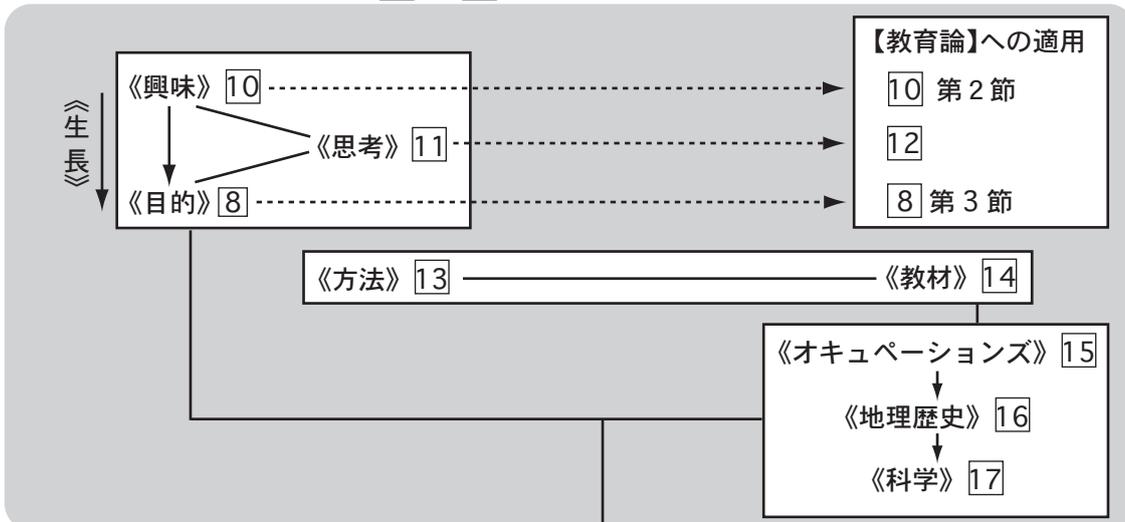
訳者解説

デューイ『民主主義と教育』（1916年）構成＝体系図（0は章をあらわす）

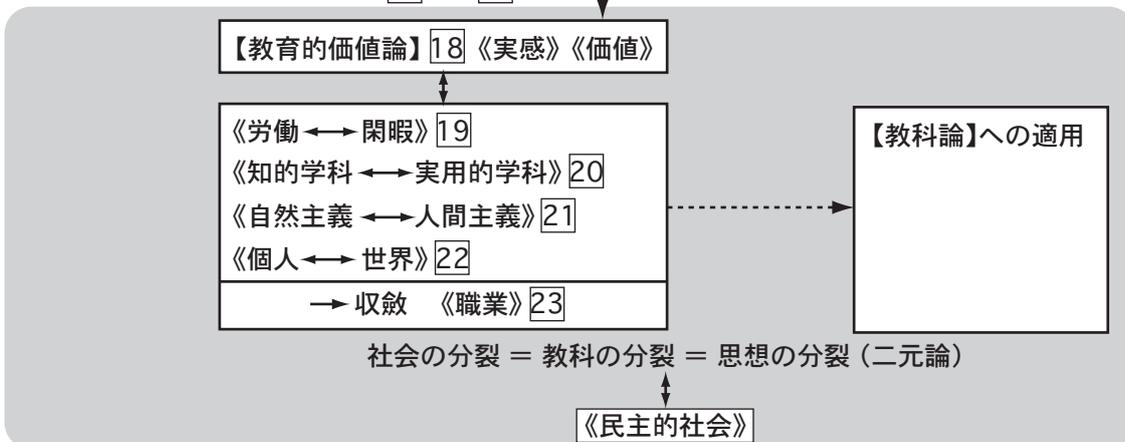
I：【民主的基準の導出過程論】（1～7）



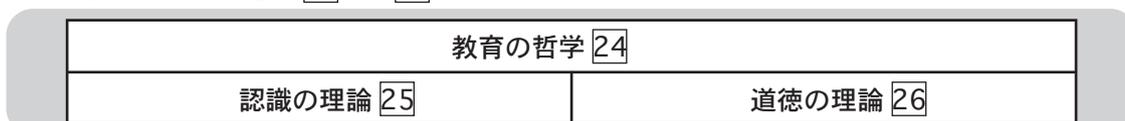
II：【民主的教育の本質論】（8～17）



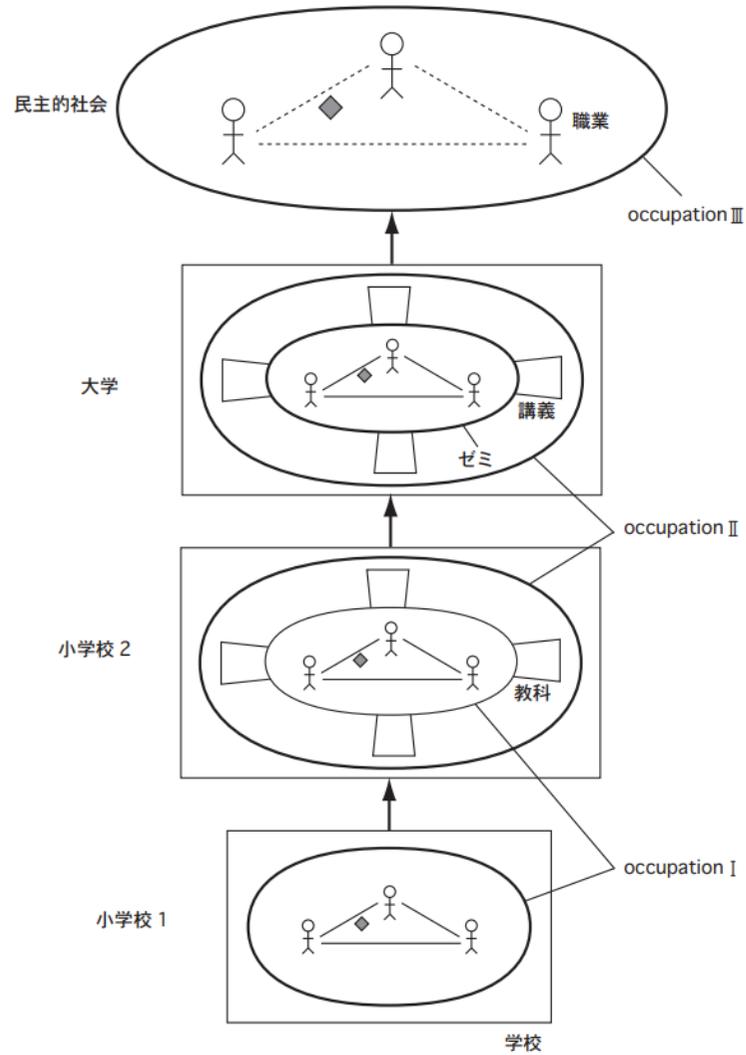
III：【民主的基準の実現論】（18～23）



IV：【哲学的総括論】（24～26）



Occupations の発展（総合学習からゼミ、そして民主的社会へ）



☆カリキュラムとしてみた場合、子ども・生徒の主体性を軸にすると、経験カリキュラム、コアカリキュラムの形態をとっていく。

☆上下に、教材の系統性などある。共通目的も、授業目標・学級目標～学校教育目標→日本国憲法→国連憲章

教材の連続性と「見方・考え方」最終回 <http://kodomo.kitanagoya.org/eye/eye/2002.pdf>

☆それぞれの活動で相互の「エンジョイ〇〇」が育っているだろうか。

世界・日本・地域の問題

ぼけなんか怖くない グループホーム 「エンジョイ着付け」の直井さん

実社会 企業、行政

学年会

メッセナゴヤ

卒研ゼミ

教育実習 クラスの把握（「座席表」）

業界研究会

Team のグループ

オープンキャンパス

学年

クラス、部活、委員会、総合的な学習／探究の時間

泥・水・砂あそび 土山（保育園）



富岡美織「から子どもたちが得るもの」（『生活教育』2019年2月号 pp.26-35） 5MB

<http://www.nisseiren.jp/kibouwo/tomioka.pdf>

eYe「希望の根っこ」2019年3月号 pdf版

<http://nisseiren.jp/kibouwo/1903nekko.pdf>

思い起こしつつ、学校にそのような活動、つまり料理、編み物、裁縫、木工、金工、栽培などを導入しようと提案した。

導入してみると、子どもたちが生き生きと活発になり、表情が明るくなり、騒がしくなり（活発に話し合う）、学校の雰囲気が一変した。ここには人間の本性・内なる自然 (human nature) に即した「何か」確かなものがあるとの直感・実感、世界中の同じような試みを始めた実践家たちに共有されるものだった。

デューイはシカゴ大学に学部長（哲学・心理学・教育学）として在籍していた1896年に、付属实験学校 (Laboratory School) を開設して自ら実践・指導を行った。はじめは生徒16人、教師2人。3年間だけの実践で他校へ統合されて終了した。この途中報告とさらなる協力を訴えた3つの講演と関連する論文をまとめたものが『学校と社会』であり、新教育のいわばバイブルとして世界的ベストセラーとなった。

導入された諸活動をデューイはまず《オキュペーションズ (occupations)》ととらえた。新しい教育は、「子どもをしつけておらずムチで子どもの心から悪魔を追い出していない神に逆らう行為」「単なる遊びで教育の名に値しない」などのような強い非難の中で行われることがあった。それらに対して『学校と社会』は、すでに広がっていた実践家たちの直感・実感に理論的根拠を与え、心の支えになったことが広く読まれた一因であろう。

《オキュペーションズ》は、活動的作業、仕事、労作、生活などと訳されているが、「占める」という語源は、「子どもが何かに心を奪われて、何かにとりつかれたかのように熱中・専心している」状態を表している。デューイは《オキュペーションズ》をさらに《胎芽的社会 (an embryonic society)》ととらえ、それが価値高く美しく調和のとれた民主的な《大きな社会 (a larger society)》に育つ実践を構想した。

《オキュペーションズ》には、仲間がおり、先達もおり、共通の目的と参加・コミュニケーションと調整がある。問題状況の中でその解決、目的の実現がはかられる。各自の居場所があり、役割分担が行われる。直接的な声や想像的な《声》のやりとりと議論がある。道具を使って集団的にモノや自然に働き

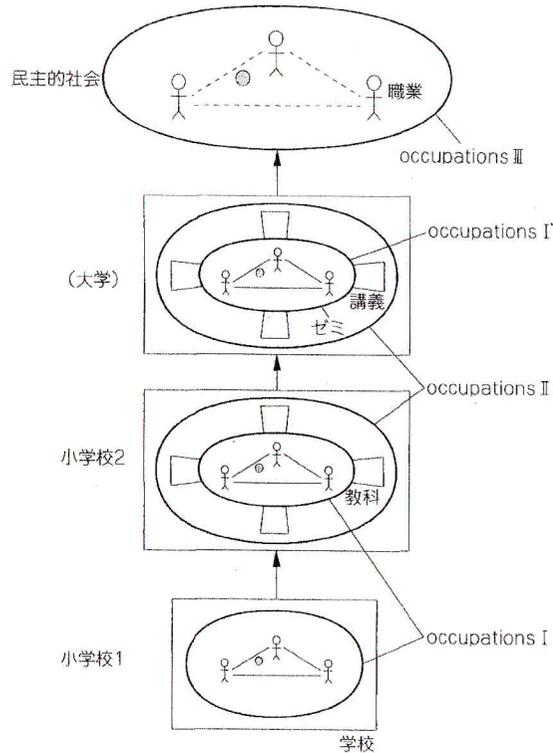
3 新教育と《オキュペーションズ》

(1) 『学校と社会』(1899年)をめぐって

分裂の時代にあつて、《総体性=全体性=統一性の回復・更新・実現》をデューイはめざしたが、教育の場においては、とりわけ、学校が、人間自身の、そして子ども自身の必要性から分裂・遊離していることに問題を見た。

開拓時代の「大草原の小さな家」には、水くみやろうそく作りなど生産活動があり、家族は小さいながら一つの共同体であった。子どもにも切実な必要性と役割があり、生活の中で子どもたちは学び成長した。デューイは、それらを

図10-1 Occupationsの発展 (総合学習からゼミナール, そして民主的社会へ)



かけ、そのとき情報や知識を使ったり、知恵をしぼったり、科学を学び発展させたりする。必要性を感じる生活があり、生活陶冶がある。人間本性が開花していく生長 (growth) がある。一体感があり安らぎがあり達成感がある。人間同士の連帯、自然との共生がある。外部の人間集団や自然との豊かなやりとりがある。これは小さくとも立派に一つの探究的生活共同体だといってよい。

「Occupationsの発展」を図にまとめてみた (図10-1)。この図を下から見てほしい。《一》(Einheit) なる細胞が、発達・分化・生長するイメージである。

日本では、「学級」がそういう共同体でもありうるが、明確には総合学習といわれるような諸活動が《オキュペーションズ》に相当する (I)。《オキュ

ペーションズ》はその内部に分化した構成要素 (教科や情報センターなど) を複雑に保ちながらその全体をも《オキュペーションズ》として発展する (II)。そしてついには、大きな社会になっていく (III)。このIIIのレベルでは、「共通の目的」は「社会的目的」になり、「道具」は「生産手段」になり、「役割分担」は「職業」になるなど、同じ構造が内容を社会的に拡大・充実させて出現する。occupationには、「職業」という意味もあるのである。直接的な「声 (voices)」のやりとりは、vocation, calling (職業・天職) などの社会的で想像的な声のコミュニケーションになり、産業社会を編成する。

理解の補助線として大学のゼミナール (I) を発展過程の間に入れてみた。日本では、文献研究を手堅く集団で行いながら、フィールドワークに出たり実験・調査に取り組むゼミが増えている。研究室は探究的生活共同体ともいえる。デューイの構想は、現実には今日の大学をイメージすると理解しやすい。総合学習と教科の関係も、ゼミと講義の関係で考えると、二項対立の発想を克服しやすい。特に中学校・高等学校で「総合的な学習の時間」で何をしたいかわからないという教師の悩みがあるが、大学時代のゼミを思い起こし、それぞれの学校で生徒たちと一緒にゼミを行うことを考えてみれば、やりたいことが次々湧いてくるのではないだろうか。

山崎英則 編著『西洋の教育の歴史』筑山書房、2010年。

花園
フレーベルの
子どもの園 (幼稚園) の
イメージ
der Kindergarten
キンダー ガルテン